

Title	生田正輝著『マス・コミュニケーションの諸問題』
Sub Title	M. Ikuta : Mass communication, its theory and problems
Author	十時, 巖周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1957
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.30, No.2 (1957. 2) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19570215-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19570215-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖のままのこされていた研究部門であつた。「この領域における今日の要請は、概説的、総合的研究よりも、むしろ新資料の追求および部分的、特殊的研究である」とは、本書の序文における教授の言葉であるが、まことに滿腔の同感を禁じえない。ただし、特殊的研究の集積のうえに、はじめて、総合的な概観は形象されなければならぬからである。

教授は、豊富な資料を丹念に蒐集整序され、精緻な考證にもとづいて明快に所論を展開されるが、そこには、あくまでも實證的に眞實を把握しようとする學的態度の、全編にみながつているのを、筆者はつよく感得する。そして、ゆたかな學殖に裏付けられた鋭利な洞察は、格調ただしい筆致とあいまつて、讀むものをして、一握の疑團をものこすことなく理會させずにはおくまい。

戦後の十有餘年、明治刑法史をめぐる教授の不斷の研學は、いまや貴重なものをもたらしした。本書こそ、學界の期待にこたえた學問的香りたかい所産であり、昨年掉尾をかざるかがやかしい收穫である、といつても、けつして溢美の言ではない。

摺筆にのぞみ、教授に衷心から敬意と感謝をささげると共に、將來の御加餐を、切に希念するしだいである。

なお、本書は、本塾法學研究會の出版補助金にもとづき、同會から發刊されたものであるが、今後同補助金による論著の上梓を、この機會に切望したい。(慶應通信株式會社發賣 A5版 二六六頁 頒價四二〇圓)

(向井 健)

生田正輝 著

## 『マス・コミュニケーション』

### の諸問題

#### I

われわれの日常生活は、マス・コミュニケーションの洪水のなかにあるといつてよいであろう。このマス・コミュニケーションの巨大な影響力から逃れて、われわれの誰れしもが、現代社會に生きてゆくすべを見出そうとすることはとうていできそうもないことである。好むと好まざるとにかかわらず、われわれは、マス・コミュニケーションのすざまじい洗禮からまぬかれることはできないのである。

マス・コミュニケーションの現代社會における役割や機能は、つとに社會諸科學の注目するところであり、ことさらに在來の新聞學に限定されることなく、社會心理學、社會學、文化人類學、政治學等々の領域においても、もはや今日では、それぞれの専門的研究に際して無視することのできない重要なファクターの一つとなつていゝる。それは、これ迄の専門化された諸特殊科學の枠組のなかにおいては、處理することのできない新しい學問領域を構成しているもの

といわねばならない。つまり、マス・コミュニケーションの問題は、従来の諸特殊科學の統合的研究によつて開發されるべき、學問上の一つの處女地に該當するものと考えられるのである。

ところで、全ての學問がそうであつたように、この若い開拓期にある學問領域においても、解決しなければならぬ多くのむずかしい問題が山積している。その原因としてはいろいろの理由があげられるであろうが、まず、その對象領域の極度の複雑性と廣汎性が指摘されるであろう。また、開拓者が忍ばねばならないものもろの實證的調査資料の不足をあげなければならぬ。例えば、マス・メディアの一つとしてのテレビジョンが、一地域社會において如何なる社會的機能を果しているかの問題を取上げてみても、その問題は極めて複雑であり、實證的調査技術上の障害もまたいう迄もなく嚴しいものがある。それは、一地域社會の枠組に限定され得る問題でもなければ、ナショナル・レベルで追求され得る問題でもなく、兩者の機能的關係に注目しなければならぬ複雑な問題を提起している。その他、マス・コミュニケーションの社會的機能のみならず、その歴史的發展過程や制度的諸様相をも考慮しなければならぬであろう。その赴くところ、ますます複雑多岐にわたらざるを得ないのである。

今日の段階では、マス・コミュニケーションの一般理論が老大な實證的裏付けによる「重み」をもつて權威ある存在となるには、いまだ程遠いものがあると考えられる。この學問領域は、また、それだけなおさら魅力的な存在となつていることも否定できないところである。それはともかくとして、最も重要にして、かつ、困難な

問題を孕むこの學問領域において、ここに新たに本書の附け加えられたことの意義は極めて大きいものがあるといわねばならない。以下、本書の概要を紹介しながら、將來においても、なお多くの叡智が集中されるであろうところの、マス・コミュニケーションをめぐる諸問題點について考察してみたいと思う。

## II

本書は、五篇、一六章（序章を含む）六〇節からなる老大なスケールのもとに、マス・コミュニケーションの諸問題をあらゆる側面から究明しようとする。

序章「コミュニケーションと人間社會」においては、人間社會の存續と人間相互のコミュニケーションが相互に不可分の關係にある雛型を提示し、マス・コミュニケーションの問題の出發點を措定する。

第一篇「マス・コミュニケーションと近代社會」においては、(1) マス・コミュニケーションの成立とその發展、(2) 近代社會におけるマス・コミュニケーションの機能、(3) マス・コミュニケーションと大衆社會、の三章にわたつて、この學問領域の中心課題を摘出する。特に、社會學諸理論との交流による近代社會と大衆社會の分析においては、操作の困難な問題に對し鋭利な分析のメスを手際よく進めている。例えば、マス・ソサエティの問題に關しても、それが理論社會學の中心問題とされるに到つたのは極く最近のことであり、この問題の探求には、マス・コミュニケーションの存在を無視しては到底成立しないのであつて、いわば、兩者は絶對不可分の關係にあ

り、理論社會學とマス・コミュニケーションの科學的統合的研究が必要とされる所以である。さらにいえば、なお多くの隣接諸科學との交流なくしては、第一篇に取上げられた諸問題の妥當な解決は成立し得ないものといえるであらう。

第二篇「マス・コミュニケーションと政治」においては、(4)マス・コミュニケーションと世論、(5)マス・コミュニケーションと政治的無關心、(6)マス・コミュニケーションと國家、(7)マス・コミュニケーションに對する政策、(8)マス・コミュニケーションの自由、の以上五章にわたつて、政治學の側面からみた諸問題が取扱われている。序文において米山教授が指摘される如く、「理想型として概念され得る世論を探索しつつも、他方においてそれがマス・コミュニケーションを通して現代の大眾社會に於ける新しい社會的關係とどういつた關連にあるかを見極めようとする」ところに、第二篇の主題を見出すことができよう。現代の大眾社會における世論の概念規定については、これ迄にも幾多の論議が繰返されてきたが、この點に關して、著者は、米山教授の所説をはじめ幾多の學説を紹介しながら、理想型として概念され得る世論を指定した上で、それに伴うマス・コミュニケーションの果すべき役割を力説する。その場合、マス・コミュニケーションの實態の分析については、それが現代社會において果している順機能と逆機能の兩側面からこの問題に接近を試み、獨裁國におけるマス・コミュニケーション對策と照合しながら、民主主義國における世論政治の危機を鋭く摘發する。そこには、注目すべき多くの示唆を見出すことができよう。

第三篇「マス・コミュニケーション・メディア」においては、(9)

新聞、(10)ラジオ、(11)映畫、(12)テレビジョン、の四章によつて、各メディアの發展過程、その特質、現状等を、相互に比較對照しながら素描している。これ迄のマス・コミュニケーション研究の中には、ややもするとメディア論に終始するものが多かつたが、本書におけるメディア論の取扱ひ方は、一般理論の構成に必要な限りの素材の提供に止められ、しばしば指摘されるような羊頭狗肉の誹りを退けているものといえる。

第四篇「事業としてのマス・コミュニケーション」は、(13)マス・コミュニケーションの商業性、(14)マス・メディアの獨占、集中化、の二章によつて構成される。ここでは、資本主義社會に巢喰う社會的害毒のマス・コミュニケーションにおける症状を、それが現代社會に齎らす反社會的機能を指摘することによつて示そうとする。特に、マス・コミュニケーションに瀾漫するコマースヤリズムが、どれほど大衆を害し現代社會を毒するかは、如何に強調しても強調し過ぎることはないであらう。

最後の「社會主義社會のマス・コミュニケーション」の第五篇においては、(15)ソヴェト連邦のマス・コミュニケーション、の實態が紹介され、社會體制の相違によるマス・コミュニケーションの地位と役割が浮彫りにされている。ここでは、現代の諸國家において、マス・コミュニケーションに如何に重要な役割が與えられているかがよく理解され、改めて考えさせられるべき重要な問題が提起されている。

以上、本書の概略を紹介してきたのであるが、そこにみられるように、この新しい學問領域における諸問題點や、もろもろの統合的

研究の方法が、ほぼ了解されたことと思う。

### III

ところで、マス・コミュニケーションをめぐる諸問題に關して、その一般の輪廓が本書において示されたわけであるが、それは前にも述べたように、いまだ實證されざる幾多の諸假説をめぐつての論議であつた場合が含まれてのことであつた。しかしながら、この學問領域が經驗的實證科學としてより一層の發展を遂げるためには、これ迄に構成された諸假説を中心とする實證的研究が集積されねばならないであらう。まして、かた時も停止することのない現代社會におけるマス・コミュニケーションの變容過程は、かかる精力的な實證的研究によることなくしてはとうていその實態を把握することはできないのである。そういつた意味で、本書は、この種の研究の一般のオリエンテーションを示したものとしてその價值は高く評價されるが、將來の問題は、本書を一つの踏石としてその橋頭堡を如何に前進せしめ得るかに殘されているといえよう。既存の理論を破壊するのに躊躇する科學は滅亡するといわれるが、われわれは、本書に示された一般的オリエンテーションを、それにのつとりながらもより實證的な諸研究で以つて勇敢に改訂していくことに躊躇してはならないであらう。そうすることが、この新しい學問領域の發展への一つの途であり、かつ、隣接諸科學がそこから攝取しうる成果をより増大せしめる途ともなるのである。

なお、やや蛇足をつけ加えるならば、最近、社會心理學、特に、

### 紹介と批評

精神分析の手法がマス・コミュニケーションの問題に投入される傾向がみられるが、本書においては、この方面の記述にやや手薄な感じが免れないようである。こういつたアプローチのしかたの妥當性はともかくとして、マス・コミュニケーションの問題は、ことほどさように多種多様な側面から追求されている現状にあるといえるようである。

そのことはともかくとして、本書は、マス・コミュニケーション研究に關する一つの新しい方向を示唆し隣接諸科學との交流による斯學の理論的水準を示している點で、一般に高く評價される勞作の一つである。終戦直後、この方面の研究に志したといわれる著者の十年來の學問的努力の結實として、本書が出版されたことに心からの敬意を表するとともに、本書が広く一般に讀まれることを切望して止まない。(慶應通信株式會社刊 昭和三二年發行 三三六頁 定價四六〇圓)

(十時嚴周)